文処理から見た英語(SVO)と日本語(SOV)
——名詞句と節の長さ及び埋め込みの比較

小　川　　明

0. 本稿では英語と日本語を名詞句と節の長さ及び埋め込みの二つの観点から比較し、その差が文処理と密接に関係し、その根源がSVO対SOVであることを明らかにしたい。

1.1 まず長さの観点からそれぞれの言語の名詞句と文を比較してみよう。最初に英語について調べてみる。英語においては、名詞句において前置修飾と後置修飾の両方がある。以下主要部を太字で表す。

(1) a. the general **framework** of the Principles and Parameter Approach to language acquisition

b. the most cited **writer** in the humanities

注目すべきことは、前置修飾が長くなることを避ける傾向が顕著に見られることである。Biber et al. (1999: 597-598) によれば、前置修飾の70－80%は修飾要素はひとつである。2つ修飾要素がつくのが20%で、3ないしは4つ修飾要素がつくとわずか5%になる。この理由は要素間の論理関係を推測しなければならず、読み手と聞き手にとって重荷になるからであるという。

(2) a. new **trousers**

b. official **negotiations**

c. funny whistling **noises**

d. settled legal **practice**

e. genuine, nonstrategic legal **rights**

後置修飾について見てみよう。前置修飾要素が主として形容詞などに限ら

れるのに対し、さまざまな要素が後位修飾することができる。またその要素は複雑な構造を持つ。Biber et al. (1999: 575) によれば、

関係代名詞節

the **job** *I was doing last night*

Ing 節

the imperious **man** *standing under the lamppost*

Ed 節

a stationary **element** *held in position by the outer casing*

To 不定詞

enough **money** *to buy proper food*

前置詞句

compensation *for emotional damage*

形容詞句

the extremely short duration **varieties** *common in India*

後置修飾は会話に置いては、あまり使われなく、逆に学術的な散文においてはきわめてよく使われる。そしてきわめて長くなる可能性をもつ。長い例を挙げてみる(Biber et al. (1999: 607))。

(3) a. **Mortality** *among stocks of eggs stored outdoors in the ground;* **eggs** *collected the following spring from a large number of natural habitats in the central part of the province*

b. Further **evidence** *of the association of winter egg mortality with sub-zero temperatures and snow cover*

さらに次の現象がある。しばしば's所有格と of 句は同じ用法を持っていて、競合する場合がある。その時名詞句が複雑になると of 句が使われる。つまり長くなると前置修飾から後置修飾に変わる(Biber et al. (1999: 305))。

(4) a. *the trustee's* **appointment**

b. *Mr Walsh's* **murder**

c. the recent **appointment** *of a part-time woman and two men*

d. the **withdrawal** *of the service to the port's St Andrew's Road area*

また次の現象も前置修飾が短くなる傾向があることの証拠としてあげることができるであろう。単独の形容詞は、前置されるが、それに修飾要素が付くと後置される。

(5) a. a *keen* **student**

b. a **student** *keen on jazz*

(6) a. a *fat* **man**

b. a **man** *fat around the waist*

以上の観察から英語は、前置修飾とは対照的に、後置修飾は長くなる傾向を持つことが明らかになった。ここで1つの疑問が生じる。なぜ英語では、名詞句において前置修飾は短くて後置修飾は長くなることができるのか。これについては、後で戻ることにする。

1.2 それでは文に目を転じてみよう。名詞句において名詞が核になるように、文において動詞が核になると考えてみよう。そうすると、文においても名詞句とパラレルな現象が見られる。文でも動詞の前の要素、つまり主語は短くなる傾向がある。それとは対照的に動詞に続く要素はいくらでも長くなれる。次の文章を見てみよう。動詞を太字で、主語を下線で示す。動詞の前後の要素を比較するとすぐに明らかになる。

(7) <u>An interesting general correlation</u> **appears** to be emerging between performance and grammars, as <u>more data</u> **become** available from each. <u>There</u> **are** patterns of preference in performance in languages processing several structures of a given type. <u>These same preferences</u> **can also be found** in the fixed conventions of grammars, in languages with fewer structures of the same type. <u>The performance data</u> **come** from corpus studies and processing experiments, the grammatical data from typological samples and

from the growing number of languages that **have now been subjected** to in-depth formal analysis.

(John A. Hawkins: *Efficiency and Complexity in Grammars*)

また英語では、主語を短くする手段を様々持つ。さまざまな外置化によりSを文尾に移動して主語を短くする。太字の主語から移動した要素が[ ]で示してある。

(8) a. **It** had been clear for some time [that the demands of the arms control process would increasingly dominate military planning].

b. **The time** was coming [for me to leave Frisco], or I would be crazy.

c. Toward the close of the Old English period **an event** occurred [which had greater effect on the English language than any other in the course of its history].

さらにBiber et al. (1999: 623) によれば、実際にコーパスにあたってみると関係代名詞節は主部にはめったにしか生じない。(Head nouns of relative clauses rarely occur in subject position in the matrix clause (only 10-15% of the time across registers.) その理由は、関係代名詞節は主節を分断して、聞き手や読み手は関係代名詞節を処理してから主節の動詞にたどり着かなければならないからとしている。(… relative clauses with subject heads disrupt the matrix clause－hearers/readers must process the relative clause before reaching the main verb of the matrix clause.) 具体例を挙げてみる。

(9) a. The opposition Civic Forum, *which rejected the communist-dominated cabinet unveiled by Mr Adamec at the weekend*, is demanding a more representative government staffed mainly by experts.

b. However, the abstract relationships between Subject and

Landmark *which it [=of] expresses* appear seldom to be even hazily based on any mental image of a spatial relationship.

c. All current natural language parsers *that are adequate to cover a wide range of syntactic constructions* operate by simulating nondeterministic machines, either by using backtracking or by pseudo-parallelism.

それに対して、(10)が示すように、動詞の後の関係代名詞節はいくらでも長くなることができる。

(10) This is the farmer sowing the corn,
that kept the cock that crowed in the morn,
that waked the priest all shaven and shorn,
that married the man all tattered and torn,
that kissed the maiden all forlorn,
that milked the cow with the crumpled horn,
that tossed the dog,
that worried the cat,
that killed the rat,
that ate the malt,
that lay in the house that Jack built.

Xバー理論の始まりであるChomsky (1970) においても名詞句と文との構造上の平行性が指摘されたのであった。しかしその時は長さについては、問題にされなかったように思われる。整理すると、

(11) 英語では、名詞および動詞の前後の両方にそれに掛かる要素が生じ、前部では長い語の連鎖を避ける傾向がある。

2.1 さて日本語はどうであろうか。極めて簡単である。名詞句においても文においても、それに掛かる要素は常に前に置かれるのである。後置される要素は、助詞や助動詞のように限られている。それゆえ前置要素と後置要素の

長さの比較は生じない。名詞句の例。

(12) a. さっき境内を掃除にきた**おばさん**

b. 明かりをさげてゆっくり雪を踏んできた**男**

次は文の例である。

(13) a. 息子は大学に**通う**

b. 娘は夕飯のあといつもテレビを**見る**

このように、常に主要部は最後にくる。やはり日本語においても名詞句と文の平行性、つまりどちらにおいても主要部より前に生じることが観察されるのである。これは言語類型論と関係する (cf. Greenberg (1963); 松本克巳 (2006); Whaley (1997))。

2.2 それでは、日本語において前置される要素の連鎖の長さを調べてみよう。もし英語のように前置された要素は短くなる傾向が日本語にも当てはまるとすれば、日本語の場合は、名詞に掛かる要素も動詞に掛かる要素も常に短くなる傾向をもつはずである。このことを念頭におき調べてみる。それは、ほぼその予想を裏切らない。

連体修飾節は短くなる傾向がある。特に英語の関係代名詞節に対応する連体修飾節は短くなる。このことについては、小川 (2005) で論じたので要約する。安西 (1995) は、関係代名詞節をそのまま和訳すると不自然になる場合が多いことを指摘する。いくつか例をあげよう。(a)は安西による直訳、(b)は安西による翻訳である。

(14) A great many Americans who had never paid much attention to Japan, and probably would have gone through life ignorant of and uninterested in Japan, were required to take notice when the war came.

a. [日本には大した注意は一度も払ったことがなく、おそらく日本については無知で興味のないまま生涯をすごしていたであろう] 非常に多くの**アメリカ人**は、戦争がきた時、注意せざるをえなくなった。

b. 大部分のアメリカ人は、日本のことなど大して注意をはらったこともなく、そしておそらくは、日本のことなど何も知らず、興味もないまま生涯を終っていたにちがいない。ところがそういうアメリカ人も、戦争になってみると、いやでも日本に注目せざるをえなくなったのである。

(15) Let us not neglect as we grow older the pleasure of re-reading books which we remember we liked when we were young, but which we have mostly forgotten and which we should like to read again.

a. 齢を取るにつれて、[[若かった時に好きだったと覚えている，しかしほとんどは忘れており、そしてもう一度読んでみたい]**書物**をもう一度読む]**楽しみ**を大切にしよう。

b. 齢を取るにつれて、[昔読んだ本をもう一度読み返してみる]**楽しみ**を大切にしたいものである。若い頃に好きだったことだけは覚えていても、内容はほとんど忘れてしまっていて、もう一度読んでみたいと思っているような、そんな本を読み返すことにはまた格別の楽しみがあるものだ。

(16) There are plenty of races at the present day who have fully developed languages in which they can express everything that is in their mind, but who have no system of writing.

a. 現在、[[心にあるすべてのことを表現できる十分に発達した]言語をもっているが、書く組織をもたない]多くの種族がいる。

b. ある種の種族は、[十分に発達した]言語をもち、考えることはすべて口頭では表現できるにもかかわらず、表記のシステムだけはもっていない。しかもこうした種族の数は、今日でもけっして少なくないのである。

(14)-(16)を通じて(a)より(b)のほうがはるかにわかりやすい。安西 (1995: 88) はこの現象に対して、次のように述べる。

多少でも翻訳を試みたことのある人なら、誰しもかならず思いあたることだろうが、この関係代名詞という代物、いちばんの難物である。英文和訳の原則からすれば、関係代名詞のみちびく節を、そのまま先行詞の前にもってくればコトは終るはずだけれども、しかしこれでは、日本語として、ほとんど理解不可能な文章になってしまうことも少なくない。

そしてその原因を英語が名詞中心の性格が強いのに対して、日本語は動詞中心であるという言語の性格の違いにあるのではないかと推理している(安西 (2000: 50))。下線は筆者。

英語を日本語に翻訳していて、いちばん頭を悩ませる難題の1つがこの関係代名詞であることは、少しでも翻訳を試みたことのある読者なら先刻御承知のはずだと思う。いや別に翻訳の経験などまったくなくても、もし英語に名詞中心の性格が強いとすれば、その必然的な結果として、関係代名詞という問題がでてくることは容易に理解できるはずだ。英語は名詞を焦点として文章を構成してゆくからこそ、その核としての名詞に、長い修飾語句を関係代名詞でつなぎとめるということもできるのであって、それが英語の文章構成法の生理に合うのである。
ところが、日本語は動詞を中心にして文章を組み立ててゆくから、関係代名詞を英文解釈式に直訳して、ただ名詞の前に長い修飾句としてくっつけただけでは、日本語の骨組みに過重な負担をかけてしまう。いわば、生理的に拒否反応を起こしてしまう。

翻訳の場合は自然な日本語が要求されるので、翻訳する人たちはなんらかの技術を用いてこの不自然さを解消している。どのようにやるのであろうか。安西 (1995) が提案している方法は、

1　適当な接続詞を補って訳す。

She solved in five minutes a problem [that I had struggled with

for two hours].= She solved the problem in five minutes, although I had struggled with it for two hours.

問題を解くのに私は2時間も苦しんだが、彼女は5分で片づけてしまった。

2　いったん切る

She had an adopted child [who she says was an orphan].

彼女には養子がいる。彼女の言葉によると、孤児だったのだという。

3　分解する

This is one of the few really good books [that have been published on this subject] .

(直訳) これは、この問題について出版されている少数の本当によい本の1つである。

原文を次のように直して訳す。

Only a very few really good books have been published on this subject, and this is one of them.

この問題については、本当にすぐれた書物はごく僅かしか出ていないが、本書はそのうちの一冊である。

4　解体する

Television has not yet been applied to all the uses [which will be found for it].

テレビは、現在も多くの用途に用いられてはいるけれども、将来はまだまだほかに応用範囲が見つかるだろう。

すべて何らかの形で関係代名詞節を連体修飾節に対応させるのを避けている。つまり関係代名詞節を修飾要素としないで、先行詞と合わせて1つの文にしてしまうのである。言い換えると名詞に長い連体修飾節を掛けるのを回避するのである。

2.3 このことは、安西だけに限られるのではなく、他の人の翻訳に関する記

述にも見られる。中村 (2003: 26-28) では、次の原文の直訳 (17a) を (17b) に直すことを述べている。その時直訳におけるように関係代名詞節を後から掛けないで、英語の節の順序に従って訳すことをすすめている。このことで長い連体修飾節を避けることになる。

(17) After walking about three miles we crossed a long bridge [under which muddy water swirlingly flowed from the mountainous regions [where it had rained very heavily the previous night]].

a. [[前夜に豪雨が降った] 山岳地帯から渦巻くようにして濁流が下を通っている] 長い橋を私たちは、5キロほどあるいてから、渡った。

b. 私たちは5キロほどあるいてから、長い橋を渡った。橋の下には、[[前夜に豪雨が降った] 山岳地帯から出てくる] 濁流が渦巻くようにして流れていた。

同じことが次の直訳(18a)と(18b)の間にも見られる (成瀬 (1996: 22)。やはり安西と同じように、長い連体修飾節を避けようとしているのである。

(18) Perhaps he thought you'd seen something [that you didn't think [was anything] but [which really was something]].

(A. Christie, *The Boomerang Club*)

a. おそらく彼は、[あなたは [何でもない] と思ったけれど、実際は彼にとっては重要である] ものを何か見ていたと思ったのでしょう。

b. おそらく[彼はあなたがあるものを見ていた]と思ったんでしょう。それはあなたには何でもないものに思えても、実は彼にとっては重要なものだったんですよ。

もう一つ成瀬 (1996: 123-124) の例を挙げる。(19a) を改良したのが (19b) である。ここでは、全く連体修飾節をなくしてしまっている。

(19) A Niedwalden soldier [who was taking part in some old-fashioned military exercises] was hit by an arrow [which pinned him to a tree, so that he could not free himself or even move for nine hours]. At last he was found by a comrade of his (a Zuricher

merchant) [who asked him with sympathy, "Does it hurt?"] The man replied, "Only when I laugh."

a. [旧式の軍事演習に参加していた] ニートヴァルデンの兵士が [樹木に彼を釘づけにした]矢にあたった。そのため彼は9時間、体をふりほどくことも、いや身動きすることさえできなかった。ついに彼は、[同情をこめて「それ痛むかい？」と尋ねた]戦友の一人（チューリッヒの商人）の目にとまった。男は答えた、「ただ笑うときだけはね。」

b. ニートヴァルデンの兵士が旧式の軍事演習に参加しているとき、飛んできた矢にあたり、樹木に釘づけになった。そして9時間、身をふりほどくことも、身動き一つすることもできなかった。その姿を見つけてくれたのは、戦友の一人（チューリッヒの商人）だった。彼は同情をこめて「それ痛むかい？」ときいた。男は答えた、「ただ笑うときだけはね。」

3. 第二に、節は短くなる傾向がある。小川 (2006) で指摘したように、日本語では、文を長くするためには短い節をいくつも繋げていくという手段を取る。ここでは、英文法におけるように、全体を文と言い、その文を形成するより小さい文を節と言うことにする。太字で動詞を示す。

(20) a. 点灯夫とは、夕暮れ時に**なる**と街灯ひとつひとつに灯を**ともし**、空が**明るくなる**とその灯を**消していく**、あの仕事を**する**人のこと**だ**。

（西本郁子『時間意識の近代』）

b. もし石原慎太郎が眼光紙背に**徹する**まで熟読玩味**した**末に「これ」を**差し出した**というのが事実なら、私はこの人物がかって作家で**あった**ということを決して**信じないであろう**。

（内田　樹『狼少年のパラドックス』）

c. わたしは子供の時に日本語の「美」と**いう**単語を母語として**習い**、ずっと後に**なって**外国語で**ある**ドイツ語を**学んで**初めて、Schönheit という単語に**出逢った**のだが、実はこれが「美」の元の姿の兄弟で

あった。　　（柳父章『翻訳語成立事情』）

d. ヒトは必要に**応じて**、文が**使われた**場面や自らの経験・記憶などを**想起し**、さらには主体的に推論を**働かせながら**、能動的に意味内容を**創り出している**。　　（『認知言語学入門』の宣伝文句）

e. 小石を**敷き**、水槽を**植える**と、角材で**つくった**台座の上の一トンの水を**たたえた**水槽のなかで小さな生態系が**生まれた**。

（新野哲也「風の舞う土手」）

f. 読者は、この男と共に、人のいない路を**歩き**、人気のない家を**眺め**、風鈴の音や小鳥の鳴き声に耳を**ますます**、そして、ゆったりと畳に**寝そべっている**、その贅沢を**味わう**。　　（清水正『つげ義春を読む』）

上の観察つまり日本語では短い節を次々と連結することによって、文を長くして行くという観察を補強するものとして、玉村(2002: 32-34)の説明を挙げる。

日本語の文章や談話では、とにかく接続語を何度も使い、長々と続けるので、冗長性を感じさせるものが多い。話しことばでは、この傾向がさらに強くなる。・・・160字余りの長い話が接続語によって一続きになっていて驚かされる。相撲で行司の判定に物言いが付いたときの説明も長い。

ただ今の競技について説明いたします。行司軍配は貴乃花のすくい投げ有利と見て、挙げましたが、同体ではないかとの物言いが付き、競技の結果、曙の手の着くのが早く、軍配どおり貴乃花の勝ちと見ます。　　（1997年3月23日、春場所千秋楽、貴乃花一曙戦）

接続語句の数はおよそ100〜130というのがふつうであるが、日本人はこれを頻用する点、および使い方に厳しい制限がない点で、外国語とは機能を異にする。ドイツ語などでは個々の接続詞の用法が厳密に限定されているため、日本人のように気楽に接続詞を使うことはドイツ人には考えられない。

4.1 次に埋め込みの観点から英語と日本語を比較してみよう。英語は埋め込みを繰り返しても理解しにくくなることはない。右枝分れ言語である英語の場合は右端の要素に関係代名詞節を次々くっ付けていくことが出来る。実際にどんどん伸びていく例があることから解るように不自然には感じられない。すでに挙げた例 (10) がそうである。

(21) a. John owned **a cat** [that killed **a rat** [that ate **cheese** [that was rotten]]].

b. There are **plenty of races** at the present day [who have **fully developed languages** [in which they can express **everything** [that is in their mind]], but [who have no system of writing]].

ただし主語に関係代名詞節が次々と掛かっていくのはとても理解しにくい。

(22) **The cat** [that killed **a rat** [that ate **cheese** [that was rotten]]] went mad.

これは、一般に英語では主語をできるだけ短くする傾向があることと関係するだろう。主語につく関係代名詞節が少ないことは、(9)ですでに述べた。

4.2 それとは対照的に左枝分れである日本語では、埋め込みを何度もくりかえすと、不自然になる。久野 (1973) で示されている次の日本語の例は、たしかに理屈の上では作ることができるが、私自身には、非常に不自然に感じられる。

(23) [[[太郎が飼っている] 猫が殺した] ネズミが食べた] チーズはくさっていた。

埋め込みの回数をへらしたり、同じ助詞を繰り返さないように工夫すると幾分不自然さはなくなるが、せいぜい 2 度の埋め込みが限度であるようだ。

(24) a. [ネズミが食べた] チーズはくさっていた

b. [[その猫が殺した] ネズミが食べた] チーズはくさっていた。

c. [[その猫に殺された] ネズミが食べた] チーズはくさっていた。

長い埋め込みを避けようとしている実際の例を挙げてみる。以下の例では、

「その」とか「そんな」を用いることによって下線部を長い埋め込みにするのを避けている。

(25) a. 読者は、この男と共に、人のいない路を歩き、人気のない家を眺め、風鈴の音や小鳥の鳴き声に耳をすませ、そして、ゆったりと畳に寝そべっている、**その**贅沢を味わう。(=(20 f))

b. 齢を取るにつれて、昔読んだ本をもう一度読み返してみる 楽しみを大切にしたいものである。若い頃に好きだったことだけは覚えていても、内容はほとんど忘れてしまっていて、もう一度読んでみたいと思っているような、**そんな**本を読み返すことにはまた格別の楽しみがあるものだ。(=(15 b))

次の英文の和訳を考えてみよう。(26 a) と (26 b) と二通り作ってみる。

(26) We believe that it is quite important to note here that the development of each of these models is based on data obtained in large part from studies of isolated word recognition.

a. [[これらの個々のモデルの発展が[単独の語を認識する研究から主として得られた] データを土台にしていること] にここで注意すること] は、極めて重要であると思います。

b. これらの個々のモデルの発展は[単独の語を認識する研究から主として得られた]データを土台にしているが、**そのこと**にここで注意することは、極めて重要であると思います。

やはり「そのこと」という表現を用いて埋め込みを避けている方が理解しやすい。日本語では埋め込みは少ないほど理解しやすいことが感じとれる。

以上整理すると、

① 英語では名詞句は前後に修飾要素を付けることができ、長い関係代名詞節で修飾できる。日本語では前にのみ修飾要素を付けることができ、長い連体修飾節は避ける。

② 日本語では節が短くなる傾向がある。

③ 英語は何重の埋め込みも動詞の後であれば、不自然にならないが、日

本語では不自然になる。

5.1 これらの三つの二言語間の違いが翻訳という場面に常に顔を出すのである。(14)-(16)では連体修飾節の長さの観点からのみ見たのであるが、実は埋め込みの視点からも見る必要がある。これについては、安西では触れられていない。もう一度埋め込みの視点から同じ翻訳文を眺めてみよう。

(27) Let us not neglect as we grow older the pleasure of re-reading books [which we remember [we liked when we were young]], but [which we have mostly forgotten] and [which we should like to read again]]. (=(15))

a. 齢を取るにつれて、[[若かった時に好きだったと覚えている，しかしほとんどは忘れており、そしてもう一度読んでみたい]書物をもう一度読む]楽しみを大切にしよう。

b. 齢を取るにつれて、[昔読んだ本をもう一度読み返してみる]楽しみを大切にしたいものである。若い頃に好きだったことだけは覚えていても、内容はほとんど忘れてしまっていて、もう一度読んでみたいと思っているような、そんな本を読み返すことにはまた格別の楽しみがあるものだ。

(28) There are plenty of races at the present day [who have fully developed languages [in which they can express everything [that is in their mind]], but [who have no system of writing]]. (=(16))

a. 現在、[[心にあるすべてのことを表現できる十分に発達した]言語をもっているが、[書く]組織をもたない]多くの種族がいる。

b. ある種の種族は、[十分に発達した] 言語をもち、考えることはすべて口頭では表現できるにもかかわらず、表記のシステムだけはもっていない。しかもこうした種族の数は、今日でもけっして少なくないのである。

これを見ると英語では埋め込みが何重にもされていることがわかる。[　]

は何重にも埋め込みがある場合一番外側の埋め込みを指す。それをそのまま和訳したのが (27 a)-(28 a) であり、埋め込みをできるだけ避けたのが (27 b)-(28 b) である。やはり後者のほうがわかりやすい。(27 b) における「そんな」が埋め込みを避けるために使われていることは、既に指摘した。(25 b) を見てください。

5.2 もうひとつ福沢諭吉の翻訳の特色をこの観点から見てみよう。安西 (2000: 41-43) は、アメリカの独立宣言の福沢諭吉の訳について柳父 (1983) の考えを述べている。(29 a) が柳父による直訳、(29 b) が福沢の訳である。

(29) [When in the course of human events it becomes necessary [for one people to dissolve the political bands [which have connected them with another], and to assume among the powers of the earth, the separate and equal station [to which the Laws of Nature and of nature's God entitle them]]], a decent respect to the opinions of mankind requires [that they should declare the causes [which impel them to the separation]].

a. [人類の諸事件の経過において、[[一国民が他の国に結びつけられていた] 政治的な絆を解き放ち、[自然法と自然の神の法がその国民に付与した] 分離した平等の地位を、地上の列強の間で占めること] がその国民にとって必要になる] 時、人類の世論にたいする当然の配慮は、[[彼らが分離せざるをえなかった] 理由を宣言すべきである] ということを要求する。

b. [人生已むを得ざるの時運にて、一族の人民、他国の政治を離れ、物理天道の自然に従って世界中の万国と同列し、別に一国を建てる] の時に至ては、[其建国する] 所以の原因を述べ、人心を察して之を布告せざるを得ず。

上に挙げた三つの視点から福沢の和訳と直訳を比較してみよう。直訳はわかりにくく福沢の訳はわかりやすい。なぜか。まず第一に安西の指摘するよ

うに、名詞に長い関係代名詞節を掛けるのをできるだけ避けていること。

第二に、動詞に掛かる要素は短いこと、つまり節が短い。この観点から福沢訳を見てみよう。動詞を太字で示す。

(30) 人生**已むを得ざる**の時運にて、一族の人民、他国の政治を**離れ**、物理天道の自然に**従って**世界中の万国と**同列し**、別に一国を**建てる**の時に**至て**は、其建国**する**所以の原因を**述べ**、人心を**察して**之を**布告せざる**を**得ず**。

動詞に掛かる要素はとても短いことがわかる。

第三に埋め込みの繰り返しを避けていること。直訳 (29 a) における[[　]]の存在に注意。それと対照的に (29 b) が示すように福沢訳には二重の埋め込みはない。

さて次は同じ個所の安西の訳である。

(31) 歴史の経過にともなって、[ある国民が [政治的絆によって他国に併属されてきたこと] を嫌い、これを解消して、自然および自然を創った神の法に従い、当然の権利として独立し、世界の列強のあいだに伍して平等の地位を占めざるをえなくなった] 時、人類の輿論にしかるべき敬意をはらうならば、なぜ独立するほかないか、**その理由**を、ひろく内外に宣言しなければならない。

安西は訳文に加えた工夫を説明しているが、そのうちの１つが、原文にない動詞をいくつか付け加えたことである。そのことによって、動詞に掛かる要素はそれだけ短くなっている。また「その理由」という表現にして、埋め込みを避けている。(25)-(26)と同じやり方である。

整理すると**連体修飾節が短い、動詞に掛かる要素は短い、埋め込みをできるだけ避けている。この三つが自然な日本語訳にしている。いいかえれば、これが日本語の特徴であると言える。そしてこの三つを同時に逸脱するほど不自然になる。**

このことは、長い連体修飾節であっても、短い節を次々に連結したものは、比較的読みやすいことを予測する。例えば、

(32) a. [群馬の山村に**生まれ**、東京で苦学して電気専門学校を**出**、戦争に**行き**、肺結核の大手術を**受け**、ふるさとの生家の下の家に婿に**入った**]あなたは、電気技師として勤めていた鉱山が閉山になるとともに東京に行きましたね。　（南木佳士『天地有情』）

b. [いちはやく[ソ連の官僚主義が労働者の敵で**ある**]ことを**みぬき**、いっさいの党派性を**排し**、[熟練労働者を核と**する**]組合再生を**となえる**]異端の革命家に、知性と技能をかねそなえた熟練労働者の理想をみたヴェイユは、自分が書いた論考の大半をスヴァリーヌが編集する両誌によせた。　（富原眞弓『シモーヌ・ヴェイユ』）

これらは自然である。これは、安西の訳(31)についても言える。

6.1 なぜ日本語ではこのような3つの特徴が見られるのだろうか。それは、さまざまな要素が掛かっていくのを受け止める要素である主要部、文においては動詞、名詞句においては名詞が最後にあるためではないか。その理由を探るために、福沢の訳に関する柳父の説明を出発点にしてみよう。柳父(1983)は(29 b)の福沢の翻訳について次のように述べる。下線部は筆者。

> 文全体は、いくつかの句に切られ、はじめの一句を除いて、他はみな、「離れ」、「同列し」、「至ては」、「述べ」、「得ず」と、動詞、または動詞プラス付属語で終っている。<u>読者は、動詞が現れたところで、だいじな意味を語る言葉が分り、思考の流れはひと区切りつく。ひと区切りついた部分は一応前へ預けておいて、その先へ読み進んで行ける。</u>・・・・・こういう面から見るとき、西欧文は名詞を中心として展開してゆく構造であるのにたいして、日本文は用言を中心として展開して行く構造であると言えよう。

思考の流れはひと区切りつくという直観はとても重要である。動詞が現れたところでその文の解釈はひとまず完成する。どうしてこのように思考の流

れがひと区切りつくという感じを持つのであろうか。これは文においては、一番の核になる要素は動詞であり、それに文を構成する要素がすべて掛けられた時、終ったということになるのではないか。それゆえ動詞に掛けるべき要素が宙ぶらりんの時間が長いと不安定になるので、できるだけ短くすることが望ましい。つまり動詞に掛かる要素をできるだけ短くしようとする原理が働く。

それに対して英語では核となる動詞は主語の次にすぐ出現して、文末まで待たなくてよい。一旦掛かる要素を受け止める動詞があれば、そのあとにくる要素はすぐ動詞とむすびつけられるのである。あるいは、結び付けたあとで要素を加えていくといった方が正確かもしれない。それゆえ動詞の後に続く要素は長くなることができる。

このように考えるとどちらの言語においても、文の中の要素を動詞に関係づけなければならないという点は共通である。そしてそれが文処理においてとても重要な役割をはたす。左枝分れ言語である日本語と右枝分れの言語である英語の両方の言語において、前から順にやっていくという文の処理の仕方は全く同じであり、どちらにおいても文処理をしている時、正常な場合は戻らないし負担を感じない。もしそうだとすれば、どちらの言語においてもそれをしやすくするために文構造がなっているはずである。これはHawkins (2004) が述べていることと一致する。それゆえ日本語においては、節を短くすることが顕著に見られるのである。

同じことが名詞句の主要部である名詞についても言える。主要部にたどりつくまで掛けるべき成分は宙ぶらりんであり、思考の流れはひと区切りつかない。それゆえできるだけ前置要素を短くする原理が働くのである。つまり核になる名詞ができるだけ早く出現することが望ましい。英語においては、前置修飾要素は短くなるし、日本語では、前置される連体修飾節が短くなる傾向になる。それに対して後置される修飾要素はすぐ名詞に関係づけられるので、英語におけるように長くなることが出来るのである。

このように文処理は様々な要素を主要部に結びつける操作なのだと考えて

みる。他の言い方をすれば、句構造を完成していくという操作である。このように要素を関連づける操作はいろいろなところで言われていて決して目新しいことではない (Gibson et al. (2005); Mazuka (1998))。

6.2 この観点から今までにあげた現象を眺めてみよう。まず第一に次々と目的語に関係代名詞節が連続して掛かる英語の文について観察してみよう。

(33) [John owned a cat] [that killed a rat] [that ate cheese] [that was rotten].

ここではJohnとa catを動詞ownedに結びつける操作が終了した後、次の文であるthat killed a ratをと次々処理していけばよい。その時常に同時に一組の結びつける操作をすればよい。句構造上は、埋め込みであるが、文理解の時は平板化している。それゆえ少しも困難を感じない。そこで (10) のようにきわめて長くできるのである。それに対して、主語に関係代名詞節が付加している場合は、困難が生じる。

(34) a. [The boy slept].

b. [The boy [the girl kissed] slept].

c. [The boy [the girl [the man saw] kissed] slept].

(34 b) では、The boy をsleptに結び付ける操作が終わらないうち、the girlが出現しそれをkissedに結びつける操作を始めなければならない。つまり同時に二組の関連付けを行う必要がある。さらに (34 c) では同時に三組の関連付けをすることが要求されて、理解不能となる。

Kimball (1973) はこのような自己埋め込み文の理解が困難であることを説明するのに、次の原理を提案している。

(35) The constituents of no more than two sentences can be parsed at the same time. (同時に解析可能な文の数の上限は2である)

これによれば(34 a)は1つのSしかなく問題は生じない。(34 b) では、最上位のSから下方にむかって解析を進めると、最上位のSの解析が終らないうち、二番目のSの解析を始める必要がでてくる。しかし上限は2なので問題は生

じない。それに対して(34c)では、3つのSを同時に解析しなくてはならず理解がすぐできない。

動詞に様々な要素を結びつけるという点から見ると、主語に付く関係代名詞節と目的語につく関係代名詞節とでは、負担の点で非常に異なるのである。たとえ主語に一つの関係代名詞節がついても、動詞に他の要素を結びつける操作を同時に二組しなければならないので、できるだけそれを避けることになる。これは前述した(9)の例についてのBiber et al.(1999)の説明と一致する。それゆえ前述したように主部に関係代名詞節を含むことが少ないのである。

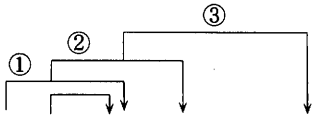
また英語において、外置化によって節を後に持っていくのは、結びつける操作が複雑にならないようにするためである。

(36) a. That he was happy was evident from his face.

b. It was evident from his face that he was happy.

(36a)では、読み手はThatで文が始まったのでこの節を動詞に結びつける準備をしながら、heとhappyを動詞のwasに結びつける操作をする必要がある。つまり二組の処理を同時にしなければならない。それに対して外置化した(36b)は常に一組だけ処理をすればよい。It was evident from his faceの処理が終了した時点で、he was happyに取り掛かればよい。

6.3 それでは、日本語においては、名詞に長い連体修飾節をかけると不自然になるのはなぜなのだろうか。この文を核になる要素に掛けるという操作から見てみよう。



(37) [[昨日池袋で**見た**] **映画**] は**おもしろかった**。

①連体修飾節の中の要素を動詞に掛ける。文におけると同様できるだけ早く動詞に関連づける。それゆえ連体修飾節はできるだけ短くなる。

②それ全体を名詞に掛ける

③その名詞句を文の最後の動詞に掛ける。名詞句の内容を動詞に掛けるまで持ちこたえる必要がある。その時名詞句が長くて情報量が多いと記憶に負担がかかるので連体修飾節を含む名詞句は短い方が都合がよい。

①と②の下線部の二つの理由から連体修飾節が短くなる傾向を持つ。

しかし長い連体修飾節の情報を保持しなければならない時、保持する時間が短ければより自然になる。つまり連体修飾節が長くても、それを含む名詞節を文の動詞にすぐ掛けることができれば少し自然になる。以下の例で比較してみよう。

(38) a. [[前夜に豪雨が降った]山岳地帯から渦巻くようにして濁流が下を流れている]長い橋を私たちは、5キロほどあるいてから、渡った。(=(17a))

b. [[前夜に豪雨が降った]山岳地帯から渦巻くようにして濁流が下を流れている]長い橋を渡った。

c. [渦巻くようにして濁流が下を通っている]長い橋を私たちは、5キロほどあるいてから、渡った。

d. [濁流が下を流れている]長い橋を私たちは、5キロほどあるいてから、渡った。

段々と読みやすさが増すことが感じられるであろう。

名詞句の情報を文の動詞に掛けるまでの時間が短ければより自然になる傾向は別の事実とも関係する。野田(2000)によれば、「日本語では、長くて複雑な構造をもった成分を、文の前の方に置こうとする傾向がある。」(39b)の方が(39a)より自然である。

(39) a. 佐々木が[[去年の夏キャンプで作った]パエリアの作り方を]知りたがっているみたいだ。

b. [[去年の夏キャンプで作った]パエリアの作り方を]佐々木が知りたがっているみたいだ。

その理由を次のように述べる。「長く複雑な構造をもった成分を文の前の方

に出すというのは、文全体の述語成分と直接関係する成分を述語成分の近くに集め、そうでない従属節内部の成分などを遠くに追い出すということである。日本語では述語成分が文末に置かれるので、長く複雑な成分は前に出されることになる。」佐伯 (1998) も「長い補語、特にそれが動詞を多く含む場合、それが後にまわると、係りと受けの関係が紛らわしくなる。それを防ごうという意識が書き手に働くため。」と述べる。

これは本稿で提案している考え方に基づくとどのように説明できるだろうか。(39 a) の場合は、「佐々木が」をどこへ掛けるか宙ぶらりんのまま次の長い要素を処理する。つまり「去年の夏」と「キャンプで」を「作った」に結びつけそれ全体を「パエリア」にさらに「作り方」に結びつける操作をする。「佐々木が」を宙ぶらりんのままで長い間処理をすることが必要である。それに対して (39 b) では、まず「去年の夏」と「キャンプで」を「作った」に結びつけそれ全体を「パエリア」にさらに「作り方」に結びつける操作を済ませる。それをどこに掛けるか宙ぶらりんのまま「佐々木が」と一緒に「知りたがって」に掛ける。その時長い要素の宙ぶらりんの時間は短い。ここから推理すると、長い要素の処理を済ました後、それをどこに掛けるかを宙ぶらりんにしておいて短い要素を処理するほうが,宙ぶらりんのまま長い要素を処理することより、記憶力にとって負担にならないであろう。途中で長い操作をすることの方が大変である。掛けるのを宙ぶらりんのまま、文の途中で長い要素を処理するのは労力がいる。

6.4 最後になぜ日本語では、埋め込みを繰り返すことが避けられるのであろうか。大前提は、今までの例が示すように、それにより連体修飾節が長くなることが多いからである。ただ連体修飾節のなかには長くても不自然さを感じないものがある。たとえば、

(40) a. [群馬の山村に**生まれ**、東京で**苦学して**電気専門学校を**出**、戦争に**行き**、肺結核の大手術を**受け**、ふるさとの生家の下の家に婿に**入った**]あなた　(南木佳士『天地有情』)

b. [早稲田の方から**きて**高田馬場の駅前で省線のガードを**くぐり**、小滝橋で[新宿から**きた**]道と**合して**中野へと**通じている**]戸塚の大通り

（佐多稲子『私の東京地図』）

ここでは並列に節が結合されている。長さだけではなく、連体修飾節のなかの構造も関係するのではないか。

それとは対照的に、埋め込みの場合は短くても繰り返すと不自然になる。

(41) [[[太郎が飼っている]猫が殺した]ネズミが食べた]チーズはくさっていた。(=(23))

(41) は、結びつける処理の点から見ると、いつも一組である。「太郎が」を「飼っている」に結びつけ、それを「猫」に掛け、それ全体を「殺した」に掛けていくように操作を繰返すが、常に結びつける操作は一度に一組である。はっきりした理由を言うことができないが、同じ処理を繰り返すことが原因になるのではないか。単に節を結合していくより、埋め込みをしていくほうが,なんらかの仕方で負担が掛かるのだと思われる。これについては、稿を改めて調べてみたい。

8. 最後に、簡単に情報量の視点から名詞句の中の主要部である名詞および文の中の動詞の位置を考えてみよう。日本語においては、名詞句の中心になる（主要部である）名詞が名詞句の最後にあり、文の中心になる動詞が文の最後にあるのに対して、英語ではそれぞれ前よりにある。(SOV 対 SVO)。日本語については、動詞が出現する前に主語とか目的語、それ以外の要素の情報が手に入るが、動詞の意味は文の最後に動詞が出現するまでわからない。しばらく待たなければならない。それに対して英語のほうは、主語の次にすぐ動詞が続き重要な意味情報が前にくる。名詞句に関しても英語では重要な情報を持つ主要部は前にくるが日本語では最後にくる。主要部は情報量をたくさん持つと思われる。そうすると主要部に到達した時点で名詞句と文における情報がかなり獲得されることになる。

山中 (1998: 216) によれば、英語においては、文構造においてもパラグラ

フにおいても重要部を前に置く。これは前者が後者において投影されているのではないかと述べる。それに対して、日本語では逆になる。

> 頭括型と尾括型に対する嗜好がこうした得失以前の問題として《自然に》確立したものであるとするならば、それがどこから来るのか理由はさだかでないが、SV [O] と [S] OV、さらには主節＋従属節と従属節＋主節という文の組み立てそのものが日英の文章の構成と同型であるという点は興味を惹く、重要部をまえに置く書き方と後ろに置く書き方は、そのじつ、それぞれの言語における文構造の投影ではないかという気がしないでもない。

また宮下(1982)も、次のように述べる。

> 英語の文では、日本語と逆に、先に結論を述べて、後に必要に応じて説明をベタベタとくつ付けます。所謂関係代名詞も〈it.....that.....〉構文も〈it.....to.....〉構文もこの展開の仕方に従つてゐます。日本語と英語の基本的な違ひを充分に分らせた上で英語の個々の知識を教へ込むことが大切だと思ひます。

9. 以上、英語と日本語を言語処理の視点から見て、言語の構造そのものが言語処理しやすくなっていることを述べた。残された問題は多いので少しずつ解明していきたい。

参考文献

安西徹雄 (1995)『英文翻訳術』筑摩書房.

安西徹雄 (2000)『英語の発想』筑摩書房.

Biber D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.

Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," *Reading in English Transformational Grammar*, ed. by R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, 184-221, Ginn and Co.

Gibson, E., T. Desmet, D. Grodner, D. Watson, and K. Ko, (2005) "Reading Relative Clauses in English", *Cognitive Linguistics* 16, 313-353.

Greenberg, Joseph H. (ed.) (1963) *Universals of Language*, MIT Press.

Hawkins, John A. (2004) *Efficiency and Complexity in Grammars*, Oxford University Press.

Kimball, John (1973) "Seven Principles of Surface Structure Parsing in Natural Language," *Cognition* 2, 15-47.

久野　暲(1973)『日本文法研究』大修館書店.

Mazuka, Reiko (1998) *The Development of Language Processing Strategies—A Cross-Linguistic Study Between Japanese and English*, Lawrence Erlbaum Associates.

松本克巳 (2006)『世界言語への視座——歴史言語学と言語類型論』三省堂.

宮下真二 (1985)『英語はどういう言語か』季節社.

中村保男 (2003)『英和翻訳の原理・技法』日外アソシエーツ.

成瀬武史 (1996)『英日日英　翻訳入門——原文の解釈から訳文の構想まで』研究社.

野田尚史 (2000)「語順を決める要素」『言語』9月号、22-27.

小川　明 (2005)「英語と日本語の名詞句の長さの比較――なぜ英語の関係代名詞節は日本語に直訳すると不自然になるのか」『英語英文学研究』（東京家政大学英語英文学会）第11号、43-63.

小川　明 (2006)「日本語と英語における節の結合方式の差――どのように文は長くなっていくのか」『東京家政大学研究紀要』第46集(1)、187-195.

佐伯哲夫 (1998)『要説　日本文の語順』くろしお出版.

玉村文郎編 (2002)『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社.

山中桂一 (1998)『日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ』東京大学出版会.

柳父　章 (1983)『比較日本語論』日本翻訳家養成センター.

Whaley, Lindsay J. (1997) *Introduction to Typology: The Unity and Diversity of Language*, Thousand Oaks.